

第 82 回公開シンポジウム

子ども同士が育む社会性の発達

- ◆ プレゼンター 酒 井 厚
山梨大学教育人間科学部准教授／発達心理学・教育心理学
- ◆ パネリスト 赤 西 雅 之
甲南女子大学総合子ども学科教授／幼児教育学
- ◆ 会 一 色 伸 夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 82 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子ども同士が育む社会性の発達」というテーマです。主旨としましては、私たちが社会で生きていく力は、養育者や大人からの教えばかりでなく、友だちやきょうだいの関わり合いから育まれていきます。幼児期から青年期にかけて、子ども同士の営みは、社会性の発達にどのように関わっているのでしょうか。子ども同士の関わりを支える大人の役割にも目を向けて一緒に考えてみたいと思います。

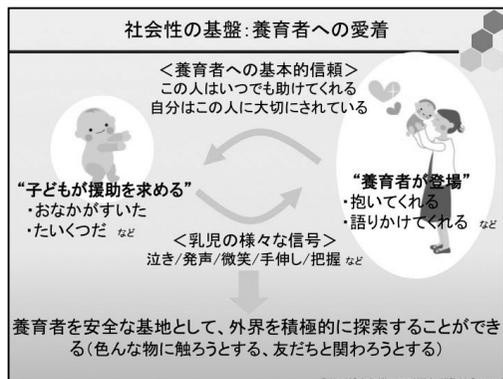
今日のプレゼンターとして基調講演をお願いしているのは、山梨大学教育人間科学部准教授の酒井厚先生です。酒井先生は、早稲田大学を卒業されましてから早稲田大学の人間科学研究科の大学院を卒業され人間科学博士を取得され、国立精神神経医療研究センターの精神保健研究所を経て、山梨大学の方に移られて今日に至っておられます。ご専門は発達心理学、教育心理学です。パネリストは、総合子ども学科の赤西雅之先生をお願いしています。赤西先生は、姫路、加古川、明石、神戸で認可保育園を運営されています。研究テーマは保育現場の実践と理論を結びつける理想の保育ということ です。それでは酒井先生、基調講演をよろしくお願いいたします。

酒井：皆さんこんにちは。本日はお招きいただきありがとうございます。一色先生にご紹介いただきました通り、私は心理学を研究しておりまして、特に子どもを対象とした心理学を専門としております。最近とはかく、子どもの人と関わる力が変わってきたであるとか、うまく関われなくなってきているなどと言われています。私は、その人が人と関わる力、いわゆる社会性の問題について、一体どうしてそのようなことになってしまったのか、果たして本当にそうなのかということを含めて日々研究しています。今日は、人が人と関わる力を教える親、教師という大人の役割に焦点を当てるといよりは、子ども同士で何を学んでいるのかについて、心理学で考えていることをご紹介したいと思います。また、そういった子ども同士で社会性を学び合うことについて、これからの大人はどのようにそれを見守っていけばいいのか、関わっていけばいいのかについてもお話していきたいと思います。今日お話しする子ども同士の

友だち関係は、男性と女性、また年代によってずいぶん違うものなので、今からお話するような内容があまりフィットしないと感じる人もいれば、とても合うと思う人もいます。ですから、こちらで呈示させていただく内容は、平均的なものとして見ながら、皆さんも自分の小さい頃を思い出していただければと思います。

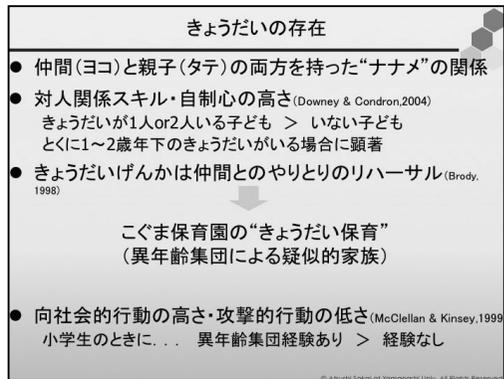
人と関わっていくというのは生まれた時から始まっていて、それをずっと続けながら徐々に人付き合いが上手くなっていきます。多くの場合は、生まれた時から親と関わって、家族の中でいろいろな人と関わります。幼稚園や保育園になると同い年の友だちと遊ぶようになって、小学校ぐらいになると、幼稚園よりはもう少し親しい付き合い方ができるようになり、仲間も増えていって集団が形成できるようになります。もちろん、学校には先生がいて、その先生との関わりでいろいろなことを学び、もう少し大きくなると恋愛もするようになり、パートナーとなる人を見つけて、中には結婚をして子どもを産み家族を築きます。こうしたサイクルで我々の人間関係は回っているわけです。そのような中で、我々は人との関わり方をそれぞれ学んでいきます。しかし、もちろん上手いくことばかりではなくて、揉めたり、悩んだりしてトラブルを起こすことがあります。むしろ、それらを解消することによって、より上手く人と付き合い合えるようになっていくと考えられています。

対人関係の中で人との付き合い方を学んでいく過程において、最初の基盤となるのは養育者との関係です。養育者との関係は、生まれたばかりの時から、子どもが援助を求めてその援助を養育者が受け入れて、上手く対応していくことを何回も繰り返していく中で育まれていきます。そういうことを続けながら、子どもは養育者が自分にとっていつでも助けてくれる安全な基地のような存在であると思うようになります。それがあから外、すなわち他の人間関係に世界を広げていくことができるというわけです。この養育者との関係がうまくいき、養育者がいつでも自分を守ってくれるという基地だと思える基盤があって、子どもは幼稚園や保育園に入ったときに、親元から離れても友だち同士で関わることができ、そこでいろいろ学んでいくようになるというわけです。



家族の中には、親ばかりではなくてきょうだいという存在がいます。日本の場合、少子化が進んでも一番多いのは二人きょうだいで、その次が三人きょうだい、次が一人っ子です。ですから、日本では多くの家庭できょうだいがいるということになります。きょうだいのいる家庭に対して、いろいろ調査、研究をした結果、きょうだいがいる場合といない場合では、子どもの社会性の発達に異なる点があることがわかってきました。例えばきょうだいがいる子どもの方が、対人関係スキルが高いといわれています。これは、きょうだいとやりとりしていることが、友だちとのやりとりにおける訓練の場になっているという考えに基づいています。上の子はどうしても下の子のやることを我慢して見てあげる必要が生じますから、上の子は特に我慢する気持ち、自制心が芽生えてくるといわれています。特に1歳、2歳ぐら

い年が離れたきょうだいの場合に、そういった傾向が顕著なようです。きょうだいと表現していますが、きょうだい関係は言葉を変えると、年齢の違う子ども同士の関わりと考えることもでき、これを実際に擬似的に作り上げている保育園があります。その保育園では、園舎をそれぞれ家のようにして、家それぞれに親役割のような先生と年齢の違う子どもたちを配置した縦割りの保育を実施しています。実際にきょうだいがいる、いないに関わらず、その園の中では、お兄ちゃん、お姉ちゃん役割、弟、妹役割ができていき、上下の関係も含めた友だち同士の関わりから、人と関わる力を学んでいきます。普通の家庭できょうだいが学んでいるようなことを保育園で擬似的に作り上げることで、つまりはそれが縦割り保育の目標の一つなのですが、社会性を伸ばそうという取り組みがされているのです。研究によれば、同様な試みが行われている学校で育った子どもの方が、同じ年の子どもたちばかりと接している子どもに比べて、向社会的行動、すなわち人に優しくする、人のために何か手伝ってあげるような行動が多く、反対に人を殴ってしまうなどの攻撃的な行動は少ないと言われています。つまり、人と関わるのに適した、人と上手く関わるのに向いた行動が養われていくということです。



こういった家庭における親やきょうだいの他に、人と関わる力を学んでいくパートナーとなるのが友だちです。心理学では、その友だちにいくつかランクを用意していて、大きく3つに分けています。一緒にいるのだけれどもあまり関わりがなく、行動や環境をただ共有しているという友だち、具体的にいうと、幼稚園とか近所でよく会う、たまに遊ぶような子、そのような子を仲間と表現しています。それがもう少し親しさが増し、小学校ぐらいに上がってお互いに協力し合って学び合う、そのような関わりが多くなった相手を友人、その中でも特にいろいろな悩みを相談し合ったり、自分の人生について話し合ったりするかけがえのない存在が親友です。我々の普段の生活の中でも、知り合いとかお友だち、友人、親友という言葉を使いますが、心理学でも、同じ年の子ども同士が付き合う時の相手を仲間と友人と親友というように分けて考えているのです。そのランクは、相手との親密さ、相手への信頼、自己の責任という観点で分かります。仲間から親友にかけて親密な関係になっていくのは、だれにとってもイメージし易いことだと思います。自分にとってはやはりこの人であると思える存在は、幼い頃からあまり意識しないながらも選んでいて、仲間の中から友人ができて、友人から親友ができていくというプロセスを経ることが多いと思います。ただ、そうした親密な関係を築いていくには、関わり合いながら、相手が信頼できる存在であると思えると同時に、自分が相手から信頼される存在であると思えなければなりません。その思いが一番強いのが親友であって、またその信頼し合う関係性でいるためには、相手に対して自分なりの責任を強く持つ必要があるのです。

このように仲間、友人、親友のそれぞれは、親密さや信頼の程度が異なるレベルの関係性です。発達に応じて、関係性が密になっていけばいくほど、人と関わる力を学んでいくレベルも上がっていくと

考えられます。ここで映像を見ていただきたいと思います。友だちが仲間の段階である幼稚園、保育園では子どもたち同士でどのような営みがあるかを見てください。

【映像】

先生： 今度をつみきでコースを作ろうとしています。

サトシ： だれか持って。

アキ： はーい。

サトシ： ぼくはここを持つから、あき君はここを持って。あげて。
もういいよ。離して。

アキ： うん。

トシ： ここで、もう一個。
ここにくると小さいね。ここをね、何かを潰せば、いけるの。だれかここに何かのつけてよ。
これがちゃんとしてくれないと。

アキ： はい、はい。

年長子ども： ここに潰して。あき君、ここに潰すんだよ。違うよ。落ちるよ。じゃあ、離してごらんよ。
そこにね、つけると思っていたの。ここにやるって言っていたんだよ。

サトシ： もう、やだよ。(泣き出す。) だから、嫌なんだよ。

先生： お友だちも何とかしてあげたいのですがね。とし君の方は自分の思いでいっぱいです。

サトシ： (泣きながら) やめてよ。ここにつけて。

アキ： だから、これを潰すんだよ。これで。

サトシ： 引っ張ったらこども落ちると思うんだよ。

大人： とし君。痛かったの。

サトシ： なんかね。落っこちるの。あの大きいのが。

年長子ども： 滑ってしまうのね。そしたら嫌なの。どうやればいいのかしらね。じゃあさあ、あれをもう一段向こう側に積み上げてみたらどうかな。

サトシ： ジュン君さ、もう一枚あの板を先に置いたら止まらないかな。

年長子ども： いいこと考えた。オーライ、オーライ。
サトシ君、今度は大丈夫だよ。できるよ、やっごらん。

あの積み木で遊んでいる場に集まっているのが仲間なのですが、お互い仲間で集まったのはいいのですが、目的もしっかりしているわけではなく、役割も分かれているわけではないので、結局サトシ君は、泣いておしまいになってしまいます。最後に少し身体の大きな子が出てきましたが、先ほど言いました縦割り保育のワンシーンと思ってもいいかもしれません。ちょっと上の年齢の子どもがやって来て、こうした方がいいよと言うことで、ことが上手く運ぶのです。仲間があまりよく分かっていないような感じで

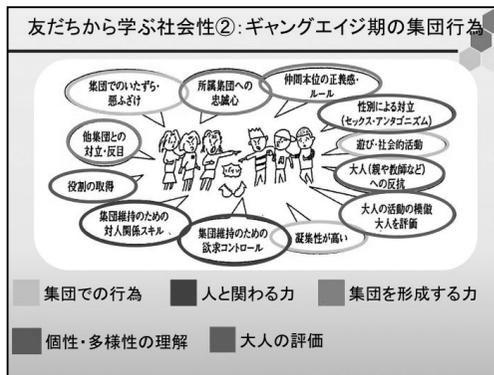
集まって、有象無象にあのようになっているのですが、結局うまくいかない。ああしてうまくいかない状況はいざごとと呼ばれていて、日々起きます。いざごとを繰り返しながら、そのいざごとを解消する過程において、人と関わる力は育まれていくわけです。今サトシ君は泣いてしまいましたけれども、いざごとは子どもにとってつらい状況であることに変わりありません。年少の頃は、そのような場合に仕返しをしたり、先生に頼ったりすることが多いわけですが、それだと上手くいかないし、一緒に友だちと遊ばなくて面白くないので、徐々にいざごとを解消する良い方法を見つけていきます。年長ぐらいになると、自分の要求を言って、それを相手に分かってもらって、お互いに楽しく遊べるようになっていきます。



今の映像は、文部科学省が幼稚園の先生になる人に向けて作った映像です。この映像には、あのよう子どもたち同士で何かいざごとが起きた時に、なるべく大人は介入すべきではないという意図が含まれています。子どもは、友だちといろいろ学んでいくのですが、その過程にはどうしてもトラブル、いざごとが起きるものであり、それらを解消していくことが必要なのです。

もう少し大きくなっていくと、子どもたちは集団を作るようになります。幼稚園ぐらいの仲間の段階では、友だちはその場その場で違うし、遊びによっても相手は違うし、固定的ではありません。先ほどの仲間、友人、親友でいえば、児童期ぐらいになると、ある程度固定した、お互いに知っている友人というレベルになります。そういう友人同士で作られた集団内でのやりとりは、いざごとを解消しながら学んでいくのとは違って、もう少し深い仲でお互いに学び合いますから、もちろんコミュニケーションも密度が濃くなりますし、起きるトラブルも根の深いものになったりします。ですから、それを解消するには、よりしっかりと考えなければなりません。対人関係を学ぶには、もう少しレベルの高い環境になるというわけです。この集団が形成される時期を、心理学ではギャングエイジと呼んでいます。ギャングエイジは徒党を組む時代という意味で、小学校高学年ぐらいを指し、そこで行われる営みが子どもたちの人と関わる力、すなわち社会性を飛躍的に伸ばすと考えられています。昔からある理論なので、今の子どもたちにどれぐらいあてはまるかを知らないといけないと思い、つい最近、私の大学で小さい頃どうだったかと学生に尋ねてみました。彼らに聞いたところでは、今の大学生でも小さい頃、気の合う仲間が何人かいて、よく徒党を組んで過ごしていたそうで、その傾向は男の子に顕著でした。ですから、今の時代にもそのような集団はあると思って良いでしょう。それでは、その集団ですることとは何か。一つは皆で一緒にいたずらをする。いたずらと言ってもいろいろありますが、集団でルールでは認められていないことをしたり、先生に嫌がらせをしたりなどが主なものです。それが時に、ある子に向かっていじめという方向になってしまうことも否定できません。集団が維持されるためには、仲間であるということをお互いに意識し合って、その関係を築くために自分の感情をコントロールしたり、たまには自分の言いたいことを言ったりしなければなりません。ですから、その集団を維持するために必要なやりとり

が人と関わる力に繋がります。また、集団を形成すること自体がその集団に所属しているという意識を持たせることになり、集団への忠誠心を高める方向へと進みます。先ほどの仲間に比べると、友人はもう少し深い関係性ですから、お互いを知らうと努力します。友人同士がお互いを知らうと努力する中で、それぞれが自分以外にいろいろな考え方の人がいるとか、いろいろな性格の人がいるということが分かり、多様性を理解していきます。同時に自分の個性にも気づいていきます。その他にも、先ほどの教師に対する嫌がらせにもつながりますが、集団だからこそ、いろいろと考えを出し合って、議論のような感じではなく普段の付き合いから、あの先生が好きだとか嫌いだとか、嫌いな先生に嫌なあだ名をつけるとかして、大人を評価するようになるのです。

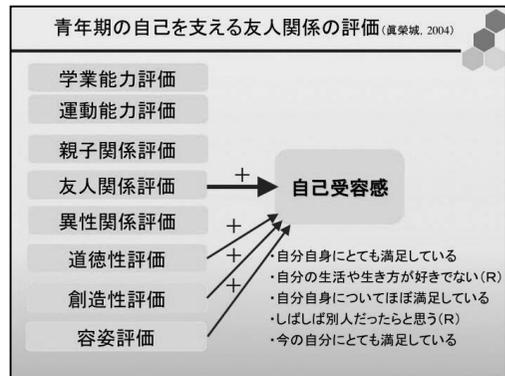


このように、ギャングエイジの時期に子ども同士が形成する集団とそこでの営みは、我々の大人社会のミニチュアであり、そこで生きていくために必要な要素が含まれているのです。仕事でもなんでも、集団の誰かと何かを一緒にするという行為は、我々の社会生活に当たり前にあることです。そこで、一人の個人として、自分の個性を保ちながら、人のことを理解して関わらなければなりません。自分のやりたいことばかりをしていては、社会は回っていきませんから、我慢することも必要ですし、かといって人の言うことばかりを聞いていても駄目ですから主張もしなければいけない。集団を維持するためには、お互いに歩調を合わせることも必要ですから、そのためには作られたルールを守ることも必要です。このように、大人である我々が社会で生きていくために必要なスキル、大人社会でも言葉を置き換えられるようなものが、小さい頃から学ばれているというわけです。

児童期を卒業すると、子どもたちは人生の一つの大きな変換点を迎えます。それが思春期です。第二次性徴を経験し、どうしても自分に意識が向くようになります。身体がそれまでと違ってずいぶんと大人びてきますから、その変化に戸惑ったりします。生物学、医学的観点からすると、その頃、ホルモンを司っている脳の部位が情動中枢も一緒に司っているから、いらいらするという考え方があったり、思春期の頃に人の認知能力が最終段階を迎えて賢くなるので、より自分の変化を複雑に捉えてしまうから、悩みが深くなるという考え方もあります。もちろん、こうした変化には個人差がありますが、多かれ少なかれ、多くの人が自分に対して悩んだり、自分に向き合うという時期に当たるということです。自分に向き合う、自分について悩むのは、この思春期の時期にアイデンティティという言葉を使って表現されます。アイデンティティをテーマにした歌はたくさんあり、やはり思春期を迎えた高校生の子どもたちにはいつの時代も人気です。皆さんの時代にどんな歌があったのか分かりませんが、例えば私が若かった頃、とても売れていて、最近の若い人でも結構知っているのは尾崎豊さんの歌です。自分という存在に対する悩みがとても濃く出ていて、その自分に対する悩みを大人や社会にぶつけて、それと対比をさせて、これから自分はどうなっていくのだろうということを語っています。そのようなことをあまり気にすることなく過ぎてしまう人も多いのですが、あまり意識していないようであっても、結構その時

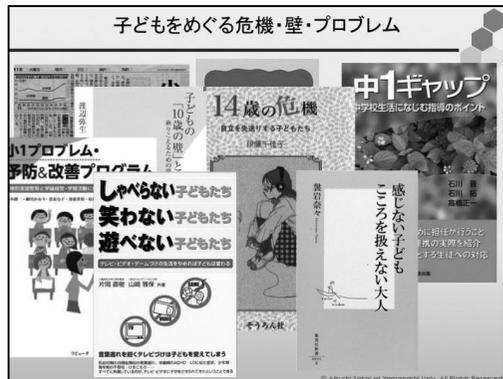
期には代弁してくれるような歌とか小説にはまり、自分の気持ちを投影させ、形を変えて自分と向き合っていたという人も少なくないのではないのでしょうか。もう少し後に流行した歌としては、dragon ashさんの歌を挙げることができます。このグループの場合は、家族という観点から自分がどういう存在であるかを悩んで、自分に向き合ったその気持ちを歌にしています。

アイデンティティに関する心理の研究の中に、自己受容感を扱ったものがあります。この研究では、子どもが自分に悩み、自分に向き合った時に、自分はこれでいい、このような存在なのだと思えることに影響する要因について検討しています。自己受容感に関わる要因はこの図に示すようにいろいろあります。プラスの矢印で示しているのは、その要因が高いほど自己を受け入れられやすいことを示しています。思春期の頃は、自分に目が向いていますし、異性に対する興味もありますから、容姿も一つの大きな要因となります。しかし、こうした要因の中で、一番強く関わっているのはやはり友人関係です。自分が友人とうまくいっているか。自分を支えてくれる存在がいるか。自分が信じられる存在がいるか。そして、自分を信じてくれる存在がいるか。先ほどの、仲間、友人、親友という観点から言うと、こうした親密で相互に信頼し合う親友との関係性による影響が大きいというわけです。また、自分をうまく受け入れられるということは、自分がこの世界で一人のユニークな存在である、これからもそういう存在であるという時間的展望が備わっている状態を意味します。この説明ですと中々ピンと来ませんが、反対に自分を受け入れられない人がどのような状態になる可能性があるかを考えるとイメージしやすいかも知れません。例えば、一つの形として考えられるのが社会的な引きこもりです。これは、自分に向き合ったけれどもなかなかそれをうまく解消できず、自分という存在が一体何なのかに迷いながら、自分を受け入れることをある意味放棄してしまった状態と言えます。引きこもりになっている人は、社会とも隔絶した生活を送ることになり、助けてくれる友人、親友をうまく見いだせなくて、なかなか社会復帰することが難しくなっていくのです。



ここまで、友だちの意義をお話してきました。先ほどの映像にあったような幼い頃の、とても無邪気な仲間との関わりからは、日々の活動の中でいざこざを起しそれを解消しながら、社会の中で生きていくための多くのことを学んでいます。もう一つ上の段階である小学校では、気の合う友人と集団を形成する中で、その集団を維持しようとするそのやり取りの中で、もう少し高度な対人関係スキルを学んでいきます。さらに、思春期を迎えて、今度は、人との関わりばかりではなくて、自分とも向き合わなければいけないのですが、その自分と向き合う時にも、自分のことをしっかりと考えてくれて信頼し合える親友と呼べる存在が必要となります。親友がいるといかないとでは、自分のことを受け入れることもそうですし、ひいてはそれが社会に適応する、社会でうまくやっていくことについての差につながっていくと考えられるのです。しかし、こうして社会性を学ぶ上で必要な友だちとの関わりが、近年では中々作りづらくなっていることが危惧されています。今このスライドで紹介している本は、子どもをめぐる危

機や壁、プロブレムと表現される社会的問題を紹介したものです。皆さんが知っているものも知らないものもあるかもしれません。かつて14歳の子どもたちが社会で大きな問題を起こし、14歳の危機ということが言われましたが、何歳の危機、何歳の壁、何歳のプロブレムという表現は様々にあります。中1ギャップや、小中高生の暴力が問題視されていますし、10歳の壁という表現もされます。これは9歳の壁とも言われていて、そのぐらいの時に学業に関する個人差がはっきりし始めることを表しています。また、小1プロブレムという言葉もあり、現代の子どもたちが、昔と比べてずいぶんと変わってきてしまったことを危惧する本がたくさんあるのです。このように、今の子どもたちは、いろいろな年齢で危機を迎えているというわけです。



また、今の若者に対しても、友だち関係が希薄になっていると表現されることがあります。これは、いつの時代にも、上の世代の人が下の人に言ってきた言葉だと思うのです。今、大学生である皆さんの世代も、前の世代に比べれば、友だち関係が希薄になっていると言われていでしょう。私が皆さんぐらいの時にも、やはり前の世代と比べて友達関係が希薄になっていると言われていました。それでは、希薄な友だち関係とはどのようなものなのでしょうか。例えば、(スライドには)立ち入らない優しさと書いてあります。これは、人と親密に関わらない方が、傷つけ合うこともないので優しい関係性でいられることを意味しています。しかし、本当は親密で内面を開示できる関わりを求めているのに、相手がそのように思ってくれていないのではないかと、迷惑がかかるのではないかと不安が先立ち、深い関係に踏み込めない場合が多いそうです。このように、友だちに対する考え方はその時代時代によって変化し、現代では、先ほどの仲間、友人、親友でいうと、親友のレベルにまで、友だちとの関係性を深めていくことをますますしなくなってきている、できなくなっていると言えそうです。

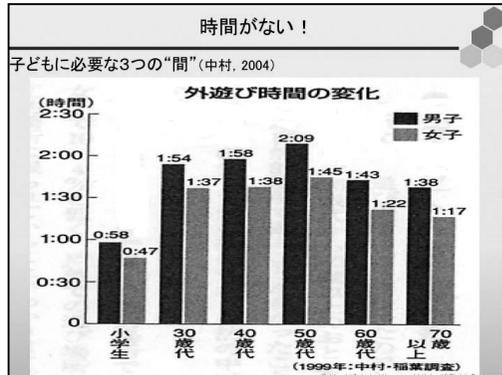
友だち関係の“希薄さ”

- 立ち入らないやさしさ(大平,1995)
- 傷つけあわないように気を遣う、互いの領域に入らないように関係の深まりを回避する、楽しさを追求してただ群れる(岡田,1995)
- 本当は親密で内面を開示できる関わりを求めているが、茶化されたり馬鹿にされるのが怖くて言えない(高垣,1988; 白井,2001)
- 自分は親密な関係を求めているが、友人はそうではない(岡田,1999)

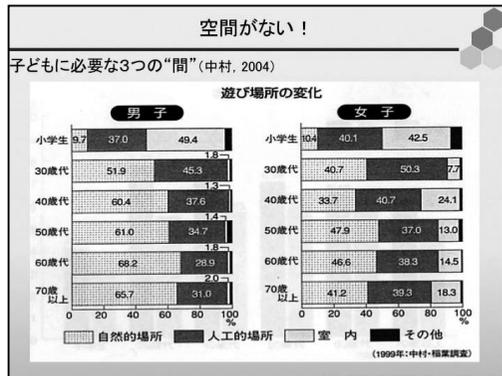


それでは、なぜそのようなになってきたのか。親友の関係性が作られる少し前の、友人とのやりとりについて考えてみます。我々が仲間、友人、親友と関係を深化させていくのであれば、友人のところであまりまくいってれば、その中から親友ができて、親友との関わりからより深い社会性を学んでいけるだろうと思うのです。希薄な関係で終わってしまうのは、友人との付き合いが中々うまくいかない、もっと言えば、実際に友人関係が作れないようになってきているのではないかと危惧があります。これもやはり昔と比べて今とはいう話になりますが、社会の構造として、現在では友だち作りに必要な3つの「間」がないと言われてます。3つの「間」というのは時間、空間、そして仲間のことです。時間が

ないというのは、外遊び時間がないことを意味しています。この(スライドに示した)結果は、運動発達の研究者が、山梨県に住む小学生から70歳以上までの年代の6千人に尋ねた調査データをまとめたものです。30歳代以上の人たちには、自分が小学生の頃を振り返って答えてもらっています。(この調査は1999年に実施したのですが)、同じ調査を2006年にも実施して同様な結果を得ていますから、今の子どもたちとの比較と考えても良いでしょう。すると、歴然と差が出ていて、小学生の子どもの遊び時間は、30歳代から50歳代の人が当時を振り返って答えた時間に比べて1時間以上も違います。ですから、今の子どもたちは、外で遊ぶ時間がとても短いのです。外で遊ぶ時間が短い理由はわかりやすく、ひとつは習い事の多さです。子どもたちのスケジュールを聞くととてもタイトで、月曜はピアノ、火曜はスイミング、水曜日な何々とたいへん忙しい。そのため、子どもたちが友だちと会う時間も少なくなります。また、遊び方がこのように(スライド)変化し、一人で室内で遊ぶというのが流行したことも大きな原因です。この遊びは、外で多くの子どもたちと自由に遊ぶという行為とは相対するものです。

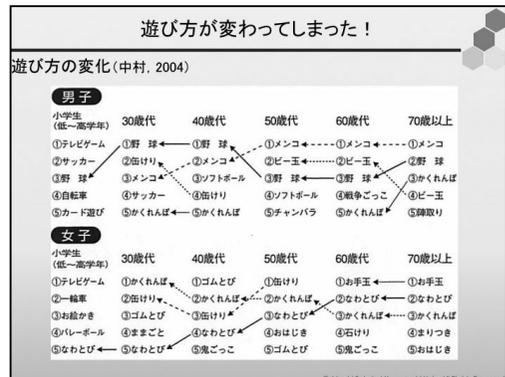
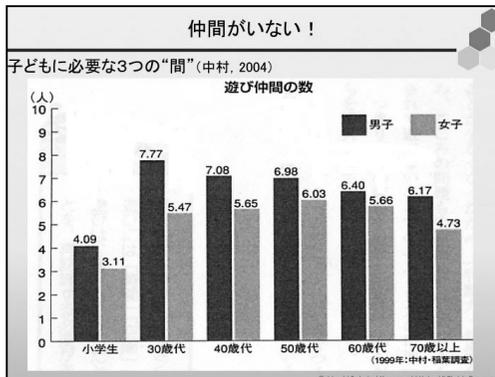


次に、場所(空間)がないことについてです。これも昔と比べて変わってきています。昔は空き地や神社などで遊ぶ姿をよく見ましたが、今はあまり見かけません。その理由には、適当な場所がありませんということもありますが、親御さんが怖くて子どもだけで外で遊ばせられないということも挙げられます。子どもを狙った犯罪が報道される度に、親としては怖くなって、子ども同士で誰も見てないところで遊ばせられないというわけです。また、公園から遊具が撤去されることも多く、遊具が全くない空き地となり、そういったところはあまり利用価値がありませんから閉鎖されたりします。子どもたち同士が集まる場所はどんどん少なくなっていきます。



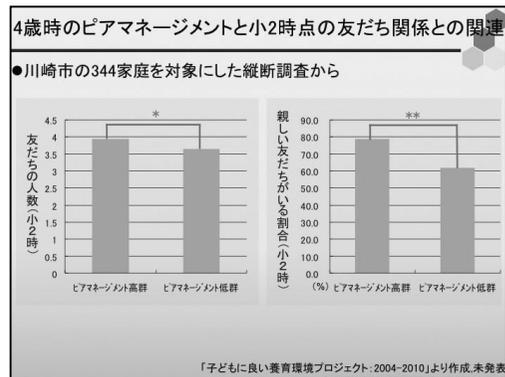
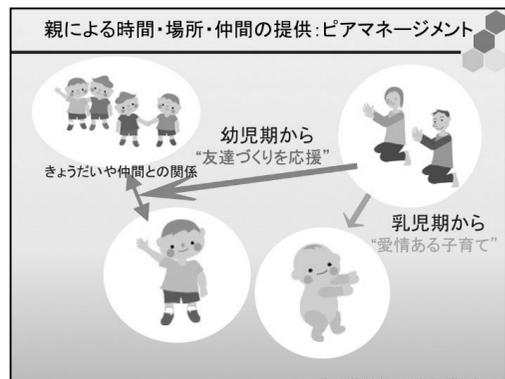
最後は、皆さんの世代がそうなのですが、少子化世代であるということです。子どもの数自体が少なく、会う機会も少なくなります。私は山梨の大学で勤めていますから、山梨の小学校などに行きますが、子どもが少ない地域は1校に10数人というところがあります。そのような地域では、友だちと遊ぶとしても友達の家が1キロ先などになってしまい、放課後は友だちと遊ぶことが難しい状況にあります。こうした状況では遊び方も限られてきます。皆さんは今の世代の人たちですから、おそらく(スライドの)一番左側の遊びが主流だったと思いますが、私や年配の方が小さかった頃は、外で皆で遊ぶことが多くありました。(スライドにあるような)鬼ごっこは非常に単純な遊びですが、それにアレンジが加えられて、ドロケイ、缶蹴りなど、いろいろな遊びに発展していきます。今の子どもたちには、ドロケ

イヤ缶蹴りと聞いても分からず、遊び方自体を知らない子どももいます。皆と一緒に遊ばないので遊び方を知らないのは当然です。3つの間がなくなってきて、遊び方も変わり、それが長く続くことで、子どもたちはお互いに関わり合う機会や、昔はそこで学んでいた社会性を育めなくなってきているのです。



この状況を打開するためには、大人が、子どもたちに時間や空間や仲間を用意することが必要であろうと思います。海外では、子どもの友だち作りをピア・マネージメントと呼び重視しています。子どもの発達に対して親がどのように関わるか。(このスライドに示すように)かつては子どもへの直接的な関わり方について色々と考えられてきましたが、これからは、子どもが友だちとどのように関わるかに対する親の間接的な関わり方についても考える必要があります。

具体的には、友だちと遊べるような場所に親が子どもを連れて行くとか、親自身が子育てを通じて知り合った友だちと一緒に子どもも連れてどこかに出かけるなど、子どもが同じ年ぐらいの仲間と会える機会を増やすというのがピア・マネージメント行動です。多くはお母さんがされていますが、最近では、お父さんも土日に子どもを子育て支援センターなどに連れて行く姿を見かけます。子どもが仲間と触れ合う日本でもこのようなピア・マネージメント活動が広く浸透していくことで、子どもが仲間と関わる機会が増えていくわけです。これ(スライド)は、私の研究グループの結果です。ピア・マネージメント行動をたくさんしていたお母さんと、そうでなかったお母さんとに分け、それぞれの子どもたちが少し大きくなった時にどうなったかを比較しました。そうすると、4歳時にピア・マネージメントによっている所まで遊んでいた子どもの方が、そうでなかった子どもに比べて、小学校になってからの友だちの数が多く、親しい友人がいると答えたケースが多い



という結果が得られました。ですから、幼児期の親のピア・マネジメント行動の多さが、小学生に上がったからの子どもの友だち関係を豊かにすると考えられるのです。

それでは、友だちの数が多いとか、親しい友人がいるというのは社会性の面でどのような意味があるのでしょうか。私どもの結果では、例えば、親しい友人がいる子どもといない子どもを比べると、いる子どもの方が問題行動が少なく、人のやっていることを手伝ってあげて気持ちを汲んであげるといった向社会的行動が高くなっていました。つまり、親が子どもを友だちと関わるような場所に連れて行ったなどのピア・マネジメント経験が多いご家庭ほど、そうでないご家庭に比べて子どもの友だち数が多く、親しい友人もでき、その友だちとのやりとりが社会性を育てていくと考えられます。それでは、どのような条件があれば、親によるピア・マネジメントは促されるのでしょうか。私どもが2歳のお子さんがいるご家庭に調査した結果では、ピア・マネジメントに関わる条件の一つとして親が外向的であることを挙げるができます。親自身が外に出かけたいという気持ちが、子どもが人が集まる場所に行くきっかけの一つとなります。また、子どもが1歳になる頃、まだ幼く十分に歩けない状態でも、外の世界に連れて行こうと思っていた意識の高い親の子どもほど、2歳でそのようなことを続けてやっていることも分かっています。

こうした親側の特徴ばかりでなく、ピア・マネジメントを支える要因として大きいのが、地域のサポートです。子どもを連れて外に出ようと思えるような地域であるところであれば、親も出かけられます。では、地域のサポートとはどのようなものなのでしょうか。私どもの調査で尋ねた項目は、自分の子どもを預けられるような人がいるとか、自分の子どものことを気にかけてくれる人がいる、自分の子どもが何か悪いことをしていたら怒ってくれる人がいる、などでした。昔は近所のおじさん、おばさんに怒られた経験がある人も多かったですが、今の子どもたちにはあまりないようです。そこには、プライバシーの保護などが先に立って、近所の人同士の関わりが難しくなってきたという背景があります。地域のサポート力があるところであればある程、親は子どもをいろいろなところに連れて行くことができますし、いろいろなところに連れて行かれた子どもは、そこで知り合った子どもたちと関わる中で、様々なことを学んでいきます。文部科学省では、このようなところに目をつけて、「放課後子どもプラン」という施策を打ち出しています。これは、学校から離れてしまうと友だち同士でなかなか会えない状況にある子どもたちも含め、放課後に学校を開放して、その中で子どもたちの関わりを増やそうというものです。この「放課後子どもプラン」では、学校の先生ではなく、地域のおじさん、おばさんたちがボランティアで、子どもたちが校庭などで遊んでいるのを見守っています。もちろん、一緒になって遊んだりするわけですが、その中で、今の子どもたちが知らないような遊び方を教えてあげることもあります。子どもたちが遊ぶために必要な3つの間の条件をなるべく揃えながら、また、昔ながらのたくさんの子どものたちが一緒に遊べる遊び方を教えることで、子ども同士が関わる機会を増やそうというわけです。実際にこうした取り組みを実践している学校は東京の都市部でもたくさんあります。子どもたち同士の関わりが増えてきて学校自体が活性化し、学校が地域の中心機関となって地域自体が活性化するという報告もあります。

ファザーリング・ジャパンという大きな団体がありまして、これ(スライド)はそこが出しているホーム

ページをお借りしてきたものです。(このスライドにあるように) 今では、育メン、育ジイなどと呼ばれ男性の親役割が注目されています。育メンには、夫として妻をサポートするとか、父親としてしっかりやりましょうということの期待が含まれていますが、育ジイには、主に、おじいちゃんにも遊び方を教えるなどの面で子どもの発達を支えてあげて欲しいという思いが含まれています。また、学校と家庭の関係性も随分と変わってきているようで、(スライドにあるように) 学校の連絡網がなくなったというニュースが報道されたりもしました。これまで、家庭と学校はいろいろな形で繋がれていたのが、どんどん分断されていって、関係が難しくなっているように思えます。家庭と学校が分断されるということは、地域がうまく機能していないことの一つの現れです。一方、その(スライドの) 右側にある「親が当番で先生」というのは、ニュージーランドに関する記事です。ニュージーランドでは、幼稚園などでたまには親が先生になって教えてみましょうという試みが続けられており、親と教師の密な関係を築こうとしています。左側(学校の連絡網がなくなる記事)とはずいぶん違う状況です。ニュージーランドのこの記事からは、その地域が家族と学校の間を良くして、地域全体で子育てをしていこうという考え方がにじみ出ています。



本日の話は、子どもの友だち関係の話でしたが、子どもたちが友だち関係を形成するには、それ相応の環境が必要です。そして、その環境を整えてくれるのは大人であり、大人が一人で環境を整えるのは難しく、親や教師が協力して、地域に働きかけて、子どもたち全員が育つようなよい環境を目指すことが重要です。そうすれば、子どもたちは友だちと一緒に社会性を育てていくことでしょう。ご清聴ありがとうございました。

一色：酒井先生どうもありがとうございました。発達心理学的な観点から、今の少子化時代にどうしたら仲間、友人、親友が作れるかまで含めてお話していただきました。それでは、このお話に対して、赤西先生からコメントをいただきたいと思います。

赤西：酒井先生、ありがとうございました。今日は、パネリストなので、いろいろとコメントを言わなければいけないのですが、先生のお話がとてもまとまっていたので何も申し上げることがなくて、困っております。

でも本当にそんなにうまくいくのかと思いながらも、もっと深く研究されていると思いますが、先生は今日、私たちのために、小さい子どもから大人になるまでを解説してくださったので、一つ一つが深まらないのは仕方がないと思いながら伺いました。

子どもが楽しそうに積み木をしていた映像がありました。私の中では、あれはとても悲しい映像で笑えません。私が一番気になるのは、泣いて部屋を出て行ってしまったあの子どもです。酒井先生は、いざこざが仲間関係を増やしてお話いただきましたが、いざこざとは喧嘩のことでもあると思いますが、あれは、いざこざではなくて、私はあの子どもがとても気に入り、では、いざこざとは一体何かと考えていました。子どもたちが喧嘩をして、考えてみると、喧嘩だけで子どもは育たないと思います。私たち大人でもそうです。今私が先生とお話をし、何か揉めたとします。このことだけで、私たちの関係がよりよく生まれていくことはありません。有り得ることはたとえば寝る前に酒井先生があんなことを言ったけれども、あの話はどういう話だったのだろう、でもあれはどういう意味なのだろう。あの時の顔は目が釣りあがって怖かったなどいろいろと考えます。先生も帰られてそのように考えていらっしゃるかもしれない。この喧嘩の後の、自らの葛藤、相手のことを思って、自分のことを思って悩みます。このことがいざこざを通して社会性が育っていくということであると思います。目の前の喧嘩よりも後の葛藤が大事であると思います。そんなことを考えながら、あの映像を思い出すと悲しくなります。先生方が後できちんとフォローされたと思います。あの部分しか見ていないので、一方的な言い方をするのはいけないのですが、私の中では、あの子どもがやっていたことがとても笑えなかったのです。私の園の子どもでも、よく喧嘩をしています。お集まりで集まった時に、喧嘩をした二人が仲良く並んで座っています。仲がいいから喧嘩をするし、にこにこ笑っている。「さっき、喧嘩をして大泣きしていたよね。仲直りしたの」と聞くと、「うん」と答えます。私は言います。サザエさんのカツオくんは、中島くんと喧嘩したら、3日間でも絶交をして口をきかない。喧嘩には力がある。たった、10分で仲直りするような喧嘩で大騒ぎしないでくれる。みんなの迷惑と私はその喧嘩を認めません。喧嘩も心を込めてしなければいけない。それは、その後、自分の中で起きるさまざま思いが、おそらく人に対する気持ちに繋がったり、社会性に繋がったりすると思うからです。

もう一点、多くの友人ができる社会性が向社会的行動の高さに繋がるというお話でしたが、社会性というのは、私の知っている子どもたちの中でいえば、友だちの数ではない。社会性は、学習能力だと思います。ですから、具体的に友だちの名前がでなくても、向社会的な行動をきちんととれる子どもはたくさんいると思います。一方で、たくさん友だちがいるのに、なかなか人のことを思いやれない子どももいると思います。小さなことですが、この辺りの細かいところは是非、伺いたいと思います。

一色：ありがとうございました。今、赤西先生が2点のことでコメントをしてくださいました。一つは、喧嘩の後の自らの葛藤の方が非常に重要であるのではないかとのご指摘と、社会性というのは、友だちの人数ではなくてというお話でしたが、これをテーマに深めていきたいと思います。酒井先生お願いいたします。

酒井：赤西先生、コメントをありがとうございました。あの映像は、本当は20分ぐらいあります。その20分の中でいざこざの場面として分かりやすいのを流しました。実はあの映像のつづきには、サトシ君に悪いことをしてしまったヒロ君という子どもが何とか挽回しようとして、いろいろサトシ君のために尽くすというストーリーが展開されます。悪いことをしてしまったヒロ君は、サトシ君との関係を挽回しようとするわけですが、そのプロセスの中でとても反省をしていると思います。自分がしてしまったことで、サトシ君を泣かしてしまいました。どうして泣かしてしまったのか、怒ってしまったのだろうかと考えながら、それを何とか解消しようとしていろいろする。簡単に謝るというのではなくて、何か代わりにしようとするのです。自分がやったことを償おうとする気持ち、一生懸命しようとする努力がないと、いざこざがあっただけでは何も学べません。それに加えて大切なのは、サトシ君もヒロ君がいろいろやってくれたことを認めて、さっきのことは忘れて、仲直りする過程が必要です。つまり、いざこざが起きて、考える場があって、お互い考えて、反省をし、結果として仲良くなるのが大切であると思います。そうする中で、こうすれば関係をうまく作っていける、こうすればより仲良くなれるということが分かってくる。それが社会性の発達について、いざこざを出した一つの理由です。

もう一点の友だちの数のことですが、数が多いこと自体が社会性の高さを意味しているわけではありません。友だちの数が多いと、社会性を学ぶ機会が他の人より多くなり、その結果、社会性が高まっていると考えられるかもしれません。私の説明が足りませんでした。友人の数が多いから、社会性が高いという直接的な関係性ではなくて、間には何かあるということです。

赤西：今、お話をいただいて、私の中でなるほど繋がりました。友人がたくさんいる中で社会性の要素とおっしゃって、そのことと、その前におっしゃった、反省して、代わりにあげるもの、償う努力をする。例えば、園で喧嘩をした後に、手紙を持ってくる子どもがいます。手紙を渡すと、相手は無然として受け取る。でも明らかに嬉しい顔をしています。中を開いてこっそり見えています。また、閉じて大事に持っています。何と書いてあったか聞くと、読めないと言います。4歳だから読めないのです。読めないけど嬉しいみたいです。だから、手紙というのは、償う努力は、葛藤の象徴の表れで、これは一つの要素だと思います。でも、今皆さんがメールでやっているやり取りは、私の時代の駅の伝言板と同じで、手紙のツールとは違うと思います。手紙というのは、葛藤の一つの象徴であるし、それを渡す、もらうというその行為そのものに重いものがある、今おっしゃった社会的な要素ですし、償う努力の一つの現われかだと思います。

一色：ありがとうございます。では、私の方から伺いたいのですが、最初のところでこぐま保育園のお話を伺いました。最後に、親も支援をしながらのピア・マネージメントが地域に広がっていくことで、少子化時代に子どもたちの仲間から親友というものを育むことができるのではないかというお話だったのですが、実際に、そうなる、こぐま保育園という具体的な例がありましたが、その他の地域でも、そういった動きが出ているのか、その辺りについて伺いたいと思います。

酒井：縦割り保育自体は、そのように名前が付いているぐらいですから、実施しているところはありません。保育園では昔から取り組んでいて、幼稚園でもそのような時間を用意していたりしています。異年齢の子どもたちが集まるという試みはずいぶん前からあるのです。こぐま保育園ではそれをバージョンアップし、家族っぼい形態にしており、上の子どもが下の子どもの面倒をみるとか、下の子どもが上の子どもの言うことを聞くとかチャレンジするなど、そういう要素がいろいろな場面で発揮されるような仕掛けがなされています。家のような形の箱ものを用意して、異年齢の子どもたちがそのような関係性になるような仕掛けになっており、それがうまく機能しているのです。一般的に、縦割り保育をしているところでは、中々こぐま保育園のような密な感じにはなっていないので、そういう意味では、こぐま保育園は特殊かもしれません。

地域の観点については、私は自分の研究で、お母さん方が子どもを連れていく子育て支援センターや地域の集まりにおじゃますることがよくあります。子どもを連れてお母さん方は集まってくるのですが、それだけでは子どもたち同士が関わる展開になかなかならず、親御さん同士は話をしているけれども、子どもたちはそれぞれ勝手に遊んでいるという状況をよくみかけます。その空間の中には、異年齢の子どもたちがたくさんいて、何か仕掛けをしようとしたら関わることができると思うのですが、お互いプライバシーには踏み入らないなどの要素もあるのかもしれませんが、集まっているという状況がありながらも、関わることができてないところが多いです。反対に、うまく仕掛けができているところは、集まった親御さんがお互いに関わり合いを通じて、子ども同士も関わるようになって、本当に友だちといえる存在になっているところもあると思います。昔から日本では、地域が場所を用意して集まる機会がありました。しかし、集まってはいるけれども、その中でどういう関係性が展開されていくかに関しては、もう少し工夫が必要な状況にあると思います。そういった意味では、こぐま保育園は、園という立場ではありますが、それをうまく実践している保育園です。

一色：赤西先生は実際に現場の保育園を運営されていますし、他のいろいろな保育園などもご覧になっていると思いますが、その辺り、地域の核としての保育園、友だち作りとしての保育園、現状としてどんなことが起こっているのか、また、これからどういったことをしたらいいのかをお話いただけますか。

赤西：縦割りということ、やむを得ずそうせざるを得ないのが、児童養護施設です。とても苦しい状況に置かれながら、皆さん一生懸命やっていて、指導者の方は、そこのお父さん、お母さんの役割を演じて、一つのモデルのような形でやっていらっしゃるところが圧倒的に多いです。幼稚園、保育園に関していうと、縦割り保育、横割り保育、中央保育、設定保育といろいろな方法がありますが、やはり子ども総合発達ですから、あらゆることを保障してあげないといけません。ですから、縦割り保育の中で足りないものは横割りの達成感とか課題活動であったり、そのような宿題が残ってきます。小学校はすべて横割りにしているので、小学校を目指すわけではないのですが、そのような課題があります。ですから、このスタイルという一つのスタイルだけで決めるのは、子どもの発達の中に保障しきれていないかなと思います。その中で一つのスタイルは核にはなりますが、あらゆる可能性をそこで展開してやら

ないといけなと印象としてあります。今はどちらかという、縦割りは廃れてきていると思います。横割りが圧倒的に強くて、幼稚園も含めて、年齢別の保育が主流になっているという印象です。それからピア・マネージメントのことですが、これは、国を挙げての子育て支援の一つの具体的な方法ですが、酒井先生がおっしゃったことも、正しくその通りで、一緒に集まっているのですが、子ども同士は、一人遊びの段階で分断されていて、中々繋がらない。結局、指導者を入れましょうとなって、絵本の先生、おもちゃの先生、親子体操の先生など、その先生方は教えてくれますが、その時間が終わると、また分断されて、遊ぶことができないという、この発想は、とてもいいし、意味がある。今の時代、未就園児が多いので、必要かと思いますが、テーマを決めてではない、もっと自然な形での指導者が望めます。皆さんには、そうなって欲しいと思います。何かを教える人は、いくらでも出てきます。皆さんが集まった中で、親同士を滑らかに関わらせることができるような次の時代の指導者が望めます。今はまだ、国を挙げての子育て支援は、酒井先生がおっしゃったところで止まっていると思います。是非、学生の皆さんが、先生になった時にそれを一歩進めてほしいと思います。

一色：子どもの発達の保障からすると、縦割りには縦割りの問題があるというお話でしたが、逆に、小学校になると殆ど横割りですが、横割りの方が学校教育では、子どもの発達の保障をするのにはいいのでしょうか。

酒井：小学生になると、(縦割りの教育は)いろいろと難しいところがあると思います。小学校では30人、40人ぐらいがクラスに入って、それを一人で教えないといけません。(横割りの教育は)教える側の立場からすると教えやすいということで成り立っていると思うのです。私のところで勉強している学生も教育ボランティアで小学校に入りいろいろと手伝っています。教室で、勉強に追いつけない子ども、他の子どもたちと同じように勉強できない子どもたちを個別に教えるサポートをしています。勉強という観点ですが、横割りは、どうしてもそこからずれてしまう子どもたちに対してどう対応するかという時にはとてもやりづらいと思います。また、同い年の子どもたちだと気後れして付き合えない引っ込み思案の子どもがいる場合に、自分より小さい子ども、年下の子どもだとうまく関わることがあります。ずっとそのような状態ではいけないと思いますが、ただ、そのような形で、全く同じ歳ぐらいのところでは気後れして関われないよりは、縦割りの中で、少し自分より小さい子どもの面倒をみる形でうまく関われる方が毎日も楽しくなるでしょう。縦割り保育には、横割りでは中々適応できない子どもが適応するのに良い面があると思います。

一色：日本の社会の大きな問題点もあったような気がします。では、学生の皆さんで質問、コメントなどありますか。

学生 A：今日は貴重なご講演をありがとうございました。友人の数が多いと、社会性が高いというお話でしたが、もう少し詳しくお話していただけますでしょうか。

酒井：先ほど議論したことの続きになりますが、友だちの数というのは減ってきています。先ほどギャングエイジに集団ができるというお話をしましたが、その集団の数自体が昔は数も多かったのです。例えば7、8とか9、10人と答える人が多いのですが、今では単位が小さくなっていて、3、4人ぐらいが多いです。人数が多いことと社会性の発達は同じではないと先ほど言いましたが、人数が多ければ多いほど、個性豊かな人たちが集まるので、いろいろなことを知ることができると思います。ですから、集団が形成されるのに、必要な人数がどれぐらいかははっきりとは分かりませんが、確かに多ければ多いほど、学べる内容は増えてくるのではないかと思います。小学生ぐらいですと、集団は男子同士、女子同士で作られる傾向があります。集団間で男子と女子に分かれて、いろいろと文句を言い合ったりする経験が皆さんにもあるかと思います。それらは、セックスアンタゴニズムと呼ばれていて、異性の集団がどういう集団かということをも自分側の集団から考えることで、自分と違う性の人はこのような考え方をするとか、このように思うのだと学ぶ場になっています。異性と対立しながらも非常に意識して、その次の思春期での自分の性の目覚めにも関係して、性について考えていく時期でもあります。ですから、数という表現からすると、集団というのはなるべく数が多い方がいろいろなことを学べると思います。集団の質というのは性によって分かれていることが多く、それによってもいろいろと学べるので、人数は多い方がいいのかなと思います。

一色：他に誰かいますか。

学生 B：今日のお話の中で、酒井先生が、子ども同士の関係が希薄であるとおっしゃっていたのと赤西先生の喧嘩が大事ではなくて、その後の葛藤が大事であるとおっしゃっていたのですが、子ども同士の関係が希薄になってきていて、今、大人と子どもの関わりも深くなくなってきている中、逆にこれからは、大人がどんどん子どもに関わって行って、そして子ども同士の関わりも深めていかないといけないと思います。また、これから子どもを叱る場面も増えると思うのですが、保育者も子ども同士の喧嘩も一緒に、子どもを叱った後に、葛藤が必要ではないかと思いました。

酒井：私がいつも自分の学生に言うのは、叱ることと同じ、もしかするとそれ以上に褒めることを教育者としては意識する必要があるって、そのバランスが欠けるとうまくいかなくなるということです。大人として子どもに関わることが希薄になっていると発言されていましたが、子どもに直接関わる関わり方というよりは、子ども同士がどう関わるかに対して、どうすればいいか難しくなっているような先生方が多かったりする印象を受けます。そういう意味では、自分が自分の考え方で子どもに向き合うのではなくて、子どもがどうあればいいかという考え方で自分は見守る姿勢で関わることも、これからの保育士には大切であると日々思っています。

一色：そういうことになると、保育士同士でもそのようなことを話し合うことも大事になってくるのでしょうか。

赤西：おっしゃる通りです。今日のお話の社会性で、やはり、大きい人から小さい人に伝えていって成り立つものが殆どで、やはり、年齢の大きい子どもが小さい子どもに伝える。私たちはルールを教えることはできますが、面白いかなどのその空気までは教えることができません。ですから、年齢の大きい子どもが小さい子どもに伝えていくという環境はとても大事で、それで酒井先生は、縦割り保育のお話をされたと思うのです。ということは、もし先生になったとして、あなたが子どもたちに大人として先生として伝えていけるものを持っておいで欲しいと思います。何を伝えるか。それをしっかり磨いて欲しいと思います。子どもたちはそれを待っていると思います。

一色：ありがとうございます。では、第一部を終了いたします。

【休憩】

一色：第二部を始めたいと思います。ご質問、ご意見などをいただきながら、今日のテーマに関することを考えていきたいと思います。どなたかご質問などありますでしょうか。

一般 A：私は27年間高校で教師をしておりました。そしていろいろ子どもと関わってきましたが、先ほど酒井先生が言われたように私自身が、社会性が低く、私の頃は横割り世代で、テレビばかりを見ていて、子どもが少なく殆ど親友と呼べる友だちはいませんが、そのような人間が教師になって27年間やってきたのは、怖いと思います。そのお陰でいろいろと子どものことを考えたくて来たのです。今、AKB48が流行っています。あれは縦割り異年齢集団ですが、総選挙などをして、中でも葛藤があるのでしょうか。外部的にはとてもシンクロしている。彼女たちの努力が働いていると思います。それが見ているものに訴えかける教育力があるのであれだけ流行っているのではないかと思います。そのような友だち関係というのも、今となっては時間を戻すわけにもいきませんから、友だちを増やすとか親密な友人関係をもう一度再構築するということは殆ど不可能なことです。AKB48のような一種バーチャルの世界が、今の子どもたちに切り込む手立てになるのではないかと思います。いかがでしょうか。

酒井：どの世代の誰に対しての話かしっかり整理ができませんでしたが、子どもたちであれば、いつの時代であっても、友だちを作る努力はあってもいいと思います。実際に、2年前に朝日新聞で行われた調査で、「あなたに親友がいますか」という質問をした調査があります。答えてくれた大半の人は、団塊の世代の60代、70代の人が多かったわけですが、3千人か4千人が答えた中で、親友がいると答えた人が6割ぐらいでした。では、その人たちがいつできた友達かという、やはり高校生が一番多くて、その当時は大学に行っていない人が多いので、中学校、小学校となります。ですからおっしゃったように、友だちと親しい関係を作っていくには、小さい頃からの友だちが可能性としては一番高く、それから親しくなっていくのが一般的なケースではないかと思います。ある人の友だち関係が新聞記事に載っていたのですが、60年付き合い合った友だちとあることをきっかけに喧嘩をしてしまった。それから6年

間音信不通になってしまった。でもやはり70歳になって、60年間ずっと連れ添った仲間と別れるのはつらいので、意を決して電話をしてみたら、先方も電話をしようと思っていたということで仲直りをしたということでした。親友と呼べるような親しい友達は、いつの時代でも大切だと思いますし、それを作れる機会は、多くは若い頃の学生時代かもしれませんが、やはり大きくなってそのような機会があるのであればあった方がいいのではないかと思います。それが友人をいつ作るのかということに対する私なりの考えです。

もう一つAKBの方ですが、非常に興味深いです。あのように投票などにがんばる若者たちの気持ちは、なんとか理解をしたいと思っています。ですが、バーチャルの世界でそれを補っているというよりは、バーチャルの世界に逃げ込んでいる印象を受けなくもありません。ゲームというバーチャルの世界を介在して友だちと関わるというのは、例えば、その場に友だちがいなくてもオンラインで繋がっていて、一緒にモンスターを倒しにいくようなゲームの中ではあることです。それが友だち関係を作る上で悪いかと言えば、やはり使い方だと思います。それが本当に友だち関係に繋がっている子どもはゲームをしながら、メールで会話をしながら、学校で会ったらそのことについて話しながら、要するに一つ一緒に遊んでいるツールになっているのです。ですが、それが全く知らない人とそれだけで関わっているのであれば、それは、関係性も難しくなったり、屈折したりすることもあるので、バーチャルの世界だけで関係性を築いていく、疑似体験をしているだけでは、学べないものも多くあるだろうと思います。

赤西：切り口を求めていらっしゃるの、とてもよく分かります。この前、高校生対象の授業を担当しました。教室に入って、雰囲気を見て、授業を始めて、話はしっかりと聞いてくれる学生たちばかりだったのですが、終わった後の雰囲気と友人関係も含めて、学校、教室の中で、彼らが作っているコミュニティといいますか、彼らの流儀があるようで、そのことと前で教えている私と、私が教えている中身とが、どうもうまく繋がらない。彼らは授業を受けることに対してとても疲れた感覚で、授業で座っていると感じました。これは彼らなりの反発なのか、私たち大人の力不足なのか、いずれにしても教室の中で、学校の中の友人体験がとても大事で、社会性を育てるためにそういうことが大事であると思いつつも、とても分断された気配を感じてしまってとても残念でした。その雰囲気を変えることは2コマぐらいではもちろんできませんでしたが、彼らの流儀の一端を垣間見た思いで、そのまま術もなく授業を終えたのですが、私たち大人は、もっと身近なところでもっと具体的にできることがあるのかなと思います。教室の中の改革をしていくと、まだまだ工夫次第でできることはあるかと思いました。

それと、AKBに関して言えば、私の考えですが、AKBは商品だと思います。だから、自分の娘がいれば、喧嘩をするかもしれませんが、おっさんたちの商品にはさせないと思います。どんなに綺麗ごとを言っている盛り上げたとしても、あれは金儲けの手段です。子どもたちに短いスカートを履かせて、好奇の目とは言いませんが、嘸し立てている気分はどういうものなのか、私は受け入れることができません。これはおじさんの独り言です。ですから、AKBは商品ですから、それを切り口しようとは思いません。

一色：ありがとうございました。では、他の方いらっしゃいますか。

一般 B：この例の中で、ピア・マネジメントというのが非常に有効ではないかということで、今そのような活動も盛んになってきているということですが、実際にピアというのは、アメリカでよく行われている活動ですが、保育園や幼稚園などの小さい子どもさんをお持ちのお母さんたちが、このピア活動で成功されている事例、それから、この地域では盛んであるという事例があれば教えていただけますか。

酒井：事例を紹介できるようなデータはないのですが、先ほど話をしたような感じでした。中々うまく言えないのですが、その地域が全体として場を提供していて、そこに通っているお母さんたちも意識が高くてということで、どこということはいえません。

一色：よろしいでしょうか。逆に近畿で、ピア・マネジメントのようなことを始めているところをご存知であれば教えていただきたいのです。

一般 B：小さな子どもさんをお持ちのお母さんたちが、地域でそのような活動をしているのは存じていますが、私も具体的には分からず、今は高等学校の生徒に積極的にその部分の活動をさせたいと思っています。

赤西先生にお尋ねしたいのですが、保育士の質と申しますが、所謂、若い世代で人との関わりが希薄になりつつあるところの幼稚園、保育園の先生が、増えていますが、赤西先生のところでは、そのような保育士の先生たちが総合的に学び合うような研修であったり、勉強会であったり、それをどのように工夫されていますか。

赤西：具体的な工夫の前にどんな課題があるのかいつも考えます。小学校、幼稚園教諭、保育士の今の日本の養成校が抱えている問題とそれは正しく重なってしまうのですが、一言で言えば、即戦力を輩出して欲しいという現場の要請、即戦力というのは、クラスで子どものきちんとしたマネジメントができること、職員間のコミュニケーション能力が高いこと、保護者に対する子育て支援ができること。もっと言えば電話の声がかわいくて掃除もきちんとして、このようなことが即戦力です。即戦力の方というのは、それに向けて能力を磨き、悪くはないのですが、すぐに役に立つ人は、すぐに役に立たなくなるということも同時に経験済みで、やはり4月5月落ちてきて、そろそろ一人のこともじっくり考えましようという時に、そこから前に進めないというのが今の先生たちが持っている一番大きな課題です。子ども理解を全身全霊、自分を通して進めて、一人の子どものことを深く考えていくという能力は、そこまで大学では中々教えてくれない。ですから、このことについては、施設側の責任としてやっていくしかない。職員の数も多いですから、折に触れていろいろな研修をしますが、一番そのところが大きな課題で、取り組んでいるところです。

酒井：先ほどの答えて、どういうものがうまくいったケースであるかということ自体の定義が難しいものですから、なかなかどこかと言えないのですが、私のこのピアサポートの研究自体は、神奈川県川崎市でずっとやっているものです。川崎市は百万都市で結構大きな都市ですから、いろいろな所から集まってきます。そんな中で地域を作り上げていくわけですから、だからこそのようなことに意識が高まっているのかもしれませんが。ですから、土着でそこにずっといる人たちが地域を作れるかというよりは、私が見ているこのケースはよそから集まってきた皆で作りに上げていく中で、よりよい子育て環境を作ろうとしてやっているところだと考えられるかもしれません。また、先ほどの「放課後子どもプラン」でよく出てくるのは、東京都の足立区です。東京都の中の都市部で新興住宅地ですが、いろいろなところから集まってくる地域の、むしろそのような街づくり自体を新たにできることもあるのかもしれませんが。いろいろな政策があると感じています。

一般 B：新しい地域を作ろう、教育をそうしていこうという時に、例えばリーダーシップをとられる方は、例えば大学の研究者の方なのか、行政の方なのか、お母さんなのか、その辺りでご存知のことがあれば教えていただけますでしょうか。

酒井：私の考えでは、やはり学校がやった方がいいと思います。学校が保護者とも繋がっていますし、その地域の入り口でもありますから、学校の中で、そういうやりとりができる人がいて、うまく仕切っていけばうまくいくのではないかと思います。学校はやはり地域の顔でありますから、それが大きな機関であると思っています。皆が集まる場ありますから、学校がそのような力を持ってくれば良いなと思っています。

一般 C：神戸で有名な賀川豊彦という方がいらっしゃいますが、その賀川さんが子どもというものは、叱られる権利があるとおっしゃっています。子どもは叱られて成長していくものだ、叱られなかったら、人間にならないということをおっしゃっているのですが、子どもを育てていく親にしろ、幼稚園、保育園の先生にしろ、叱り方が上手な方がいれば、子どもが育つのではないかと。しかし、その受け止め方が叱られたというよりは、怒られたという受け止め方をする方が多いと思います。その叱り方と怒り方の違いを先生の発達心理学的な観点からどのようなお考えか教えていただきたいのです。

酒井：大変重要で、難しい質問です。先ほど、学生さんの質問に答えたのと繰り返しになってしまうかもしれませんが、怒ってばかりでは駄目だと思います。褒めるということがあって、初めて関係が築いていけると。相手が叱られたと思うか、怒られたかと思うか、そして、叱られたことが自分のためを思ってやってくれたと思えるかどうか。怒られながらも褒めるところは褒めてもらえたということが関係をよくしてくれると思います。今は、どちらかという、怒らない代わりにあまり褒めない。要するに関係をそんなに持とうとしない、昔のように濃くしようとしない。そういう意味では、怒るのだったら褒めるところも探して褒めてあげる。探そうとするとあら捜しになって怒る部分がたくさん見つかりま

す。褒めるところがなかなかない子どもはたしかにいますが、そのような子どもにも、褒めてあげるところを見つけてあげることが必要です。褒めて関係ができていけば、いずれ、叱られたのだから直さないといけないと思ってくれるのではないかと思います。

一般 D：「放課後子どもプラン」で文科省から委託されています「のびのび広場」の安全指導員をしています。今やっていることで感じる事なのですが、1学年2クラスほどの小さな学校ですので、小さい頃から見ていると、この子どもはこういう子どもであるというのが固定されていて、乱暴な子とかは決まってしまうような気がします。それがどんどん特色が強くなって、周りもその学年だけではなくて、他学年の子どももそのように認識しているような気がします。1年生から見てきてその子どもは今4年生なのですが、下の学年の子どもであるにも関わらず、ちょっかいを出してみたり、4年生で力も強いので、1年生の子どもに腹がたったら手を出す。そういうことにどう対応していけばいいのかと困っています。先ほど、ピア・マネジメントの話が出ていましたが、そこのお母さんは、幼稚園の頃から、小学校にある絵本の読み聞かせの会などには参加されていたのですが、最近になると、小学校でお会いすることがなくなってきているのです。だから、お母さん同士の付き合いもどうなのかということがありまして、どうしたらそのようなことがなくなっていくのかが私がこの地域で過ごしていて感じているのですが、いかがお考えでしょうか。

酒井：今お話いただいたことで、私が思い出すのは、虐待をしている家庭がその地域にあった場合の話です。子どもがいつもあざを作ってやってきて、学校の先生が直接その親御さんのところに行こうと思うのだが、なかなか上手くいきません。そこで、同じクラスの親御さんたちと連携をして、そのお母さん自体も引きこもっている状況だったのですが、親同士の関係性をまず作り上げました。お母さん自体が孤立してしまってストレスを感じているのをまず和らげてから、学校の先生が介入したのです。具体的にその先生が何をすればいいのかは難しいです。わたしはピア・マネジメントという表現で、子ども同士の関係性にフォーカスを当てて話をしましたが、当然ながら親同士の関係性も、学校の先生は、何か問題があった場合は把握しておく必要があって、それぞれの関係性をうまくマネジメントすることが必要になる場面もあるかもしれません。このように言っているのは理想で、学校の先生にしてみれば、日々の業務が厳しい中、親の関係性まで考えないといけないのは難しいとは思いますが、そういったことがPTAなり公的な場としてうまくいっていただければいいですが、そうではない場合には、関係性を築くような企画を作るというのもあるかもしれません。ただ、その場合には、親御さんの中でリーダーとなってくれる人も必要で、その人と先生との関係性がうまくいっていることが柱にあると思いますから、それは、普段の親御さんとの個人の関係性でもあると思いますし、それが地域に根付いているかにもよると思います。

赤西：実際、困っていらっしゃるのですね。4月に新しい学級になった時に、ある懇談会で先生が、初めての親御さんに「家庭で先生の悪口は言わないように」と言ったそうです。それを皆さんにお伝え

しなければいけない状況というのが悲しいです。それを聞いた親御さんもそうだと思う人となぜそのようなことを言うのだろうという人いろいろなようです。でも、そのようなことを言わないで、自分で模範を示せばいいではないかということですが、その先生も、ずいぶん傷つけられたことがあって先手を打ったと私は思います。小さな学校や組織になると、どうしても、人間の評価は固定化していきます。それを改善するためには、人を増やすわけにはいきませんし、人間の評価は与えられた課題が画一化してくればくほど、固定化していきます。例えば3つしか求められるものがなければ、それにきちんと答える人がよくて、答えられなかったら駄目で、駄目な人が4つ目が結構いけている時もあるのです。ですから、人数の少なさが課題の設定の少なさみたいになってしまうと苦しい、ますます固定化します。だから、新しい試みをしてみようという今の学校行事も含めて、何か地域でいろいろなことをされると思いますけれども、何か新しい試みをやってみようということを誰かが具体的に打ち出して、そのことを通して、ひょっとすると人の見方が変わってくる可能性があります。私は、地域で小学校、中学校が廃品回収をして、土日にお父さん、お母さんが車で集めて回ります。これは子どもの仕事だと思うのですが、責任分担で親がする仕事のように、売り上げは少なくとも、子どもたちにチームを組ませて子どもたちでやってみることをどうして誰も言わないのかといつも不思議なのですが、小さいなら小さいなりに伝達がしやすくなりますから、何かこれで当たり前、去年こうであったからということから、少し形を変えてみると、違ったものが生まれてくるかとは思っています。

一色：では、他の方いらっしゃいますか。

学生 C：4年生の学生です。私は、卒業論文で、「きょうだい関係が子どもの社会性に影響をするのか」をテーマに進めています。私の仮説としては、きょうだいも影響を及ぼす一つと考えているのですが、今日の講演会の中で、きょうだいの存在というところで、きょうだいのやりとりを通して、対人スキル、自制心の高さが高くなるということは理解したのですが、きょうだいのいない一人っ子はどうか。そのままスキルが高くなるまま、きょうだいがいる人と差ができたままなのかということ疑問に思いました。その辺りをもう少し詳しく伺えたらと思います。よろしくお願いします。

酒井：一人っ子の人がずいぶん損をしてしまうということはありません。だから仲間関係の話をするのは。要するに、同じぐらいの子どもとか、少し上とか下の子どもたちと触れ合う機会として、保育園なり幼稚園があって、そこから関係をたくさん作っていきます。きょうだいは、家の中でいろいろなことを教えてくれて、外で人と関わる際にスムーズにさせてくれる存在です。だから、きょうだいでのやりとりは、幼稚園、保育園でやることのリハーサルであるという表現もあるのです。きょうだいで学んでいることが、一人っ子の子どもよりも社会性が高いと言いましたが、それはその時点、単純に比較をしただけの場合で、発達が早いかどうかだと思います。一人っ子の人がきょうだいのいる人に比べてずっとそうかという、そうではありません。きょうだいというのはあまりにも多様ですからなかなか一言では言えないのですが、研究のレベルでいうと、上の子と下の子と大雑把に分けて、どんなパーソナリティ

になるかという研究もあります。とても単純な結果だけを言うと、上の子どもは大人しくて、下の子どもはやんちゃであるそうです。上の子どもは、最初の子どものため、親も一生懸命面倒をみるからとても神経質になっていく。だから、とても丁寧に育てられた分、大人しくなるのですが、下の子どもは親も慣れているから、少しぐらい乱暴に扱うので、大きな声を出さないと親も見向きしてくれないので、やんちゃになっていくという解釈です。そのような感じで、上の子どもは、下の子どもができるまで面倒をみるように親も期待しますから、その期待に応えようとして、下の子どもの面倒をみるような感覚にもなりますし、何より自分で少し大人しくしておこうということになるので、自分の感情をコントロールするのが上の子どもの方が早く育つ、育ちやすいといわれます。下の子どもは、主張することを強く求められるのでそのような感覚で育っていくとされています。

赤西：きょうだいが多ければ社会性のスキルが高いとはならないと思います。先ほど触れましたが児童養護施設がありますが、そこは縦割りの関係で生活をしていて、皆きょうだいのように生活をしています。でも、彼らは社会性がとても苦しいのです。学び合いがたくさんあるにも関わらず、とても苦しい育ちをしていきます。なぜかと考えるのですが、きょうだいが多い、そこで社会性のスキルを向上させるためには、一つ条件がある。それは親です。親の価値観、導き方というのは、とても大事であると思います。子どもたちは、それを見ながら学んでいくわけです。親のそこでの考え方とか家族のあり方は、子ども同士だけの社会性というよりは、親を含めた中で考えた方が分かりやすい。指導者の先生方がたくさん親代わりでいらっしゃいますが、児童養護施設は、そういう意味ではハンディキャップが大きいのです。

学生 D：先生のお話にあったように、社会性の基盤である親との愛着の形成が、最初にできなかったら、その後の子どもの関わりはどのようにになりますか。

酒井：それのとても極端なケースは虐待のケースです。親に虐待をされてしまって、環境を築く基盤がない。そうすると、非常に葛藤を抱えた関わり方が多くなる。先ほど赤西先生がおっしゃったような話は、今の質問と関係するかもしれませんが、私も施設に入っている子どもたちの様子を聞いたりすると、そういった誰か信頼ができる人がこれまで十分に作れなかったということで、その後の関係性でうまく作れるという自信に繋がっていかない。つまり、自信を持ってないのです。ですから、虐待を受けた人が、例えば自分が親になって、子どもを育てるという時に、自分がきちんと子どもを育てることができるのか、愛せるのかといろいろと悩むそうです。小さい頃、親との間に関係が築けなかった人は、それ以外の関係性を築く際にも、自分の自信をなかなか持てないので、踏み出せないことがあると思います。社会性のスキルがない以前に、人と関わることに對する自信のなさがあるのではないかと思います。

学生 E：私自身は理論と現場の子どもの様子を自分の目で見て、この子どもに対してどのような働きかけができるかというのを考えた保育者になりたいと思っています。今日、実際に保育園に観察実習に行かせていただいて、4、5歳児のクラスに入って、一緒に過ごさせてもらったのですが、そのクラスが縦

割り保育の教室で、4歳、5歳、6歳の子どもがいるクラスだったのですが、6歳児の子どもが、4歳の子どもに対して、ものを譲るとか、そのようなことができない子どもが実際にいたし、4歳児の子どもが5歳児に対して、今日はこれを譲ってあげると言って譲ってあげている状況もありました。今日のこのシンポジウムで伺った社会性についてのことを踏まえて考えた時に、どうしてもかみ合わないということが起きてしまって、それは、その子ども自身の一人ひとりの家庭の環境であるとか、きょうだいがいるかとか全く分からない状況なので、推測でしか分かりませんが、きょうだいがいるから、そのようなことができるか、できないというのがあるのかなと思います。大学生になっても、集団を作って過ごしているのが現状だと思うのですが、ギャングエイジとして集団で過ごしている子どもたちが、自分たちと似た価値観を持って、そういう外見だけで判断して一緒にいるのかと思って、私は大学生活を3年間過ごしてきましたが、そのギャングエイジの集団行為として、学べることがとても狭まったものになってしまって、アイデンティティなどが確立していく時に、狭まったものしか作れないのかと思いました。その辺りをお願いいたします。

酒井：たいへん手厳しい質問であると思います。私なりに精一杯答えるとすると、年齢によって差が出る。4歳の子どもが5歳の子どもに譲るなどは、やはりきょうだいとか、家庭での育ちとかが関わってくると思います。私が講演でお話したのは、平均的な年齢として、年少から年中、年長にかけてなので、そこからうまく当てはまらないのもあると思います。それは、いろいろと他の要素も考えてみないと答えられません。今日お話をしたことを使うとすると、小さい頃から親がピア・マネージメントをしていて、2歳ぐらいから他の子どもと一緒に付き合うことが多くて、うまくそのようなことを早い段階から獲得していた子どももいるかもしれません。ですから、そのマッチングで、たまたま年齢の若い子どもがうまくて、上の子どもがそうでもなかったということかもしれません。その後、徐々に揃っていくとは思いますが。

2点目の方のギャングエイジのことですが、ギャングエイジというのは小学生高学年ぐらいを指しています。思春期以降になると、考え方が似ているとか、趣味が同じとか何かで合わせて集団が組まれていきます。その前の段階では、例えば、近所に住んでいるとか、クラスで席が近かったとか、たまたま何かで気が合ったなど、何も目的がなく、何も共通の様子も周りから見るとないような感じで集団が構成されることがあつたりします。もちろん、そのきっかけは、クラブや部活が一緒だということなどもあるかと思いますが、小学生の頃は、いろいろな個性が集まり集団が構成される可能性があつて、その中でお互いに切磋琢磨しながら学んでいくのが、ギャングエイジで社会性が学ばれていくということです。だから、思春期以降に、趣味が同じとか、考え方が同じということできいていく集団とは質が違ふものなので、そこから学ぶものは、狭いというよりは、もう少し特化したものであると思います。今日お話をしたギャングエイジは、広い多様性のある中で学び合っていくそういう時期のことを言っていました。

赤西：大学の中で、あなたが仲間たちを見ている目線とか考え方を時々感じるがありますが、今、酒井先生がおっしゃったように、例えば、とても表面的な軽い話題で、友だちになり、グループができ、そして私は仲間だよねという意識がそこにあつて、それが本物かときき返したくなる気分というのは、

とてもよく分かります。あなたが求めているのは、その次の段階、もっと深い関わりを持って初めて仲間と言えるのではないか、そのことの質の違いは、体験の中身であると思います。表面的に見えているものではなくて、一緒に何かを成し遂げたことに応じて、そのいろいろな感情体験がそこに含まれますが、その何を成し得たか、成したかの失敗も含めてですが、次は、体験の中身が一番求めているものではないかと思います。

今日、実習に行って、遊びの中で矛盾があるとおっしゃっていましたが、やはり、家庭環境があるのかということは、社会性というのは、集団の中だけで簡潔するものではないということです。例えば、夜寝る時に、お母さんに絵本を読んでもらう。このような個人的な体験も、遠い意味では社会性の意味になっているのかもしれない。ですから、友だちの中で見られる行い、行為すべてが、社会性というわけではないので、そこは広げてみたら、今日実習で行った中での子どもの姿は分かりやすいと思います。

一色：どうもありがとうございました。今日の講演会「子ども同士が育む社会性の発達」を終わりにしたいと思います。私自身は、異年齢にこだわっているのですが、学校も地域の顔ですし、保育所も地域の顔です。やはりこの社会全体が、異年齢の人たち全員で出来上がっている社会ですから、そういう意味で、学校というところだけが同年齢だけでいいのか、教育でも異年齢の方がいいのかどうかということをいろいろと考えさせられた講演会でした。